

## Acculturation : A Chief System Urbanized : Role Differentiation among the Title Holders in Western Samoa

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 真鳥 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00003739">https://doi.org/10.15021/00003739</a>

## 第 4 章

### 接 触 と 変 容 の 諸 相



パラオの港

(George Keate, *An Account of the Pelew Islands*, 1788 より)

## 都市化の中の首長システム

——西サモアにおける首長称号保持者間の役割分化——

山 本 真 鳥\*

- |                                     |                                 |
|-------------------------------------|---------------------------------|
| I. 序論                               | 2. B村の Q 称号                     |
| II. 今世紀前半までの <i>matai</i> (首長) システム | 3. C村の Sā R (称号名 R を頭とする 'āiga) |
| III. 西サモアの最近の都市化                    | V. 不在 <i>matai</i> 増加のメカニズム     |
| IV. 称号分割と不在 <i>matai</i> の増加        | VI. 結論                          |
| 1. A村の N 称号                         |                                 |

### I. 序 論

ポリネシアの首長システムは、もともと大きな社会統合を導き、地域によっては王朝や国家にまで発展したのではあるが、18、19世紀を通じての西欧との接触により、新たに成立した王権とともにほとんどの地域でシステムとして働かなくなってしまった。キリスト教の布教、捕鯨船・商船の来航、白人プランターの入植に続いて植民地化が行われ、疫病・戦争・虐殺等による人口の著しい減少の後、タヒチ、マルケサス諸島、ハワイ諸島等を始めとする多くの首長制社会は崩壊してしまったのである。それは首長システム自体の崩壊というよりは、文化・社会全体の破壊に連動したものであり、多くのポリネシア社会はこの第一の危機を乗り越えることができなかった。植民地化の波が届きにくかった離島と、そしてわずかに西ポリネシアのサモア・トンガの両諸島が、首長システムを何とか失わずにきたといつてよい。もちろん両諸島ともに、サモアは東西に分割されて各々アメリカ合衆国・ドイツの支配下に入り、トンガは独立国のままとはいえ外交権をイギリスに委ねてしまったのだから、植民地化の波を無事乗り越えたとは言いがたいが、しかし大きな変容を被りつつも、首長システムは社会の枠組として残ったのである<sup>1)</sup>。

さて小論では、そのように西欧との接触により多くの社会が崩壊する中で、辛くも

\* 法政大学経済学部

生き残った首長システムのうち、筆者が調査を行ったサモア諸島の西半分、西サモア社会の首長システムをとりあげ、その最近の都市化による変容について考察してみたい。

サモアの首長システムは合議を主体とし、ポリネシア社会ではやや異質のシステム [山本真鳥 1984: 186-188, M. YAMAMOTO 1987] であるために、ハワイ・タヒチのような統一王朝が成立せず、かえって伝統的社会システムを根底から覆すような形での植民地化が起きなかった。耕地・宅地や名声、固有の特権・役割と結びついた首長称号名 (*suafa matai*) は特定の親族集団 (*'āiga*) に属しており、在任者が亡くなるとその中で適任者が選ばれることとなっている。村の中で首長称号をもつ者たち (*matai*) は、合議のための集会 (*fono*) ——多分に儀礼的要素が大きい——を開き、村の自治を司る。このように、特定の土地や地縁共同体に基盤をもつのがサモアの首長システムの特徴で、個々の首長の独立性が大層高いのである。また称号名の授与が、より上位の首長により管理されているのではなく、個々の親族集団に委ねられているため、例えばより上位の首長称号の権威に依存する上意下達式のトンガの首長システムと比べてみると中央集権化の度合いが小さく、その首長称号保持者の一定人口に対する比率は驚くほど高いものとなっている<sup>2)</sup>。

東西サモアはもともと同じ言語・文化を共有するひとつの社会であったが、19世紀末の植民地化の結果、東西に分断されてしまった。宗主国を異にするために、各々は同じ西欧文化圏ではありながら異なる文化の洗礼を受け、また興味深いことには、宗主国の異なる植民地政策の影響から、各々文化変容の度合いを異にしている。小論の舞台である西サモアは、1889年にドイツ領、第1次大戦後ニュージーランド領となり、1962年に独立国となったが、その際首長システムを選挙制度にとりいれ、首長称号保持者のみが選挙権・被選挙権をもつというユニークな代表制をつくりあげたことで知られている。東のアメリカ領サモアが第二次大戦後、遠洋漁業の基地として缶詰工場が栄えるなど市場経済の浸透が著しいのに対して、西サモアは伝統的な暮らしを多分

- 1) もっともトンガでは、統一王朝を成立させた明君 George Tupou Taufua'ahau 1世が改革を行って伝統的首長制を貴族制と近代的官僚制に作り変えてしまったのであるから、独立は保ったものの、内側からの改革で首長制のありかたそのものは大きく変わったといってもよいかもしれない。今日のトンガ王権は、少なくとも制度的レベルではピラミッド型の首長のランキングによって国民と媒介されているのではなく、近代的立憲君主国として国民に直結して君臨しているのである。
- 2) トンガでは19世紀半ばの2万人から今日の9万人に人口が増加しているものの、近代王権が築かれてからは中央で称号授与が管理されており、40名たらずしかいない [MARCUS 1980: 119]。一方の西サモアでは1904年には総人口の7パーセントが *matai* であった [PITT 1970: 69] が、近年次第に増えて1982年には人口 (約16万人) の9.4パーセントとなっている [WESTERN SAMOA GOVERNMENT 1982: 387]。

に残している。伝統的大家族の生活や、タロイモ・タームーイモ・バナナ等の自家消費の根栽作物をつくる半自給自足経済や、伝統的演説・敬語・礼儀作法等を日常的に実践しているのである。とはいえ独立を境として、それ以前から生じていた市場経済の導入をはじめとするさまざまな近代化は加速度を増してきている。伝統的なものに誇りを持ち、それを失った東サモアの人々を半ば軽蔑している西サモア人だが、一方で先進諸国の物質文化にも憧れを持ち、それらを手に入れるための現金収入を得ることに敏感である。結局のところ、高賃金と安い関税を介して憧れの品々を手に入れることのできる隣人には隠れた羨望をもっているのである。

さて近代化そのものの首長システムへの影響力は計り知れないものがあるが、とりあえずここでは近代化の中でも都市化という問題に焦点を絞り、これが与える首長システムへの影響を考察の対象としたい。アピアという非伝統的首都の肥大化、盛んになる海外への出稼ぎ・移住等の人口移動、すなわち都市化の波の中で、村では過疎化、また村に住まない *matai* (首長、ないしは首長称号保持者) の増加、称号分割<sup>3)</sup>の急増といった社会問題が多く進行しているが、それが首長システムにどのような変容をもたらしているのだろうか。これこそが、小論のテーマである。

## Ⅱ. 今世紀前半までの *matai* (首長) システム

西サモアの人々はしばしば、この国は *atua* (キリスト教の神) と *matai* (首長システム) と *fa'aSamoa* (サモアの習慣) によって成り立つと説明する。キリスト教は150年程前に宣教師によって伝えられたものであるが、人々にとってこれはもはや生活に欠かせなくなっている。教会に行かないサモア人はいても、キリスト教信者でないことを主張するサモア人はまずいない。キリスト教の説く隣人愛の精神や平和主義こそはサモア社会を維持していく上で今では欠かせない、と知識人が主張する一方で、人々は教会行事の遂行や信仰の証としての教会建設に熱意を燃やしている。

同様に *matai* システムはサモア人にとって重要な社会制度である。大家族の各々は個々の *matai*——首長称号保持者は世帯のなかでは家長として世帯の運営にあたる——によって律せられ、*matai* のつくる *fono* (集会) が村や地方を統治する。サモア人にとって *matai* システムは、古えより連綿と続く祖先の叡知である。この伝統的システムによりサモアの社会は成り立っており、これこそは不変のシステムである和人

3) 1つの称号名の保持者は本来は1人であるはずだが、その稀少なものをめぐって争いが生じるなどを理由として、2人以上の人に同名の称号を授ける称号授与の仕方。第IV節に詳述。

々は思っているのだが、これはまた村で伝統的生活をおくる一般の人から代議士・政府高官に至るまで、ほぼすべてのサモア人に共通した考えなのである。

しかし、人々の抱く不変の *matai* システムというイメージにもかかわらず、このシステムは実際には、19世紀前半からの西欧社会との接触を通じて多くの変更を蒙ってきたようである。例えば、1934年に *Modern Samoa* を書いた F. Keesing は既にこの時代に、西サモアでは称号保持者が増加し、高位称号が大きな統合を導く要として機能しにくくなっており、また称号間の格の差は縮小しつつある、と記している [KEESING 1934: 246-256]。19世紀終わり頃には、現金や工業製品の綿布が交換財のカテゴリーの中に取り込まれ [STAIR 1897: 173; KRÄMER 1902 Band 2: 90-91; MEAD 1969: 74 など]、また第一次大戦以前から、大工に家を建ててもらふ儀礼の祝宴には塩漬け肉の樽——今日ではブタと同じカテゴリーにはいる贈与財となっている——を欠かすことができず、これを調達するために現金が必要となる [HANDY and HANDY 1924: 16-17] ことなどから考えれば、市場経済は結構早くからこの社会に入り込んでいったようである。その意味で、人類学者の記述する *matai* システムは、全く無垢のままの土着システム<sup>4)</sup>ではない。

さてここでは、人々の心に思い描く *matai* システムのモデルとなっている、20世紀前半までの伝統的 *matai* システムの概略を説明しておこう。かつて *matai* は 'āiga 構成員の生殺与奪の権を握っていたといわれるが、今世紀に入ってから *matai* にはそのような強権はなかった [MEAD 1943: 216] し、また現金経済は少しずつ人々の生活に入りこんでいた。しかしながら、今日のように各 'āiga に給与所得者が何名もいるということもないし、またニュージーランドやハワイへ出稼ぎにいった 'āiga 構成員が送金してくれるということもなかったから、'āiga 構成員の労働力を統制することは *matai* にとって重要な職務だった。そんな時代の *matai* システム、サモア人が *matai* システムと聞いて思い描くような *matai* システムについて書いてみよう。

*matai* システムは、親族システムである 'āiga システムと無縁ではない。'āiga は、メンバーの間に権利の違いはあれ、母方・父方いずれかに血縁を辿ることのできる人なら誰でも加わることができるために、結果的には ambilineal に構成される緩い親族集団である。基本家族から一地方を覆う大きな集団まで様々なレベルを含んでいる

4) ここで《土着》と《伝統》という2つの用語を明確に区別して定義しておこう。《土着的》とは既に失われてしまったものも含めて、もともと（西欧との）文化接触以前に固有にもっていた言語・文化・社会システム等に関して用いる用語である。一方、《伝統的》という用語は文化接触や変容を経てから、（たとえ大きな変化を蒙っていても）現地の人々が、それが古くから存在すると主観的に見なしている言語・文化・社会システム等に対して用いよう。

が、ここで問題とするのは、特定の村をベースとして宅地・耕地及び称号名を有し、永続して存在する 'āiga である。

まず称号名について説明しよう。称号名は固有の名前であり、代々その 'āiga に伝えられる性格のものである。称号名をもつ人が首長 (*matai*) であり、'āiga 経営のリーダーとなると共に、'āiga の外には 'āiga を代表する立場をとる。称号名には様々な義務や特権が結びついており、この称号名の継承者は前任者と同じ義務や特権をもつ存在とみなされる。かくして組織体の永続性が確保されているのである。称号名には、名の由来を説く秘密の伝承があり、その正統性を示すものとして 'āiga に語り伝えられているが、その一方で、村や地方の地縁組織のもつ称号名の構造の中で一定の位置を占める [山本真鳥 1984, M. YAMAMOTO 1987] ということにより、*matai* システムは集権的ではないが、'āiga の外側からある種の社会的コントロールも受けるようになっている。ただし土地・称号裁判所は称号名の登記や裁判を行っており、中央政府による統制的機能が働いている。

さて、こうした 'āiga は 'āiga のリーダーとなる称号名に *Sā* をつけて、例えば *Pepe* という *matai* に率いられる 'āiga の場合は *Sā Pepe* と呼びならわされるのである。この時 *Sā Pepe* は、*Pepe* の配下にまた幾つかの称号名をもつ 'āu'āiga 形式をとる 'āiga のこともあるし、'āiga の中に *matai* は *Pepe* しかいない小規模 'āiga のこともある。いずれの場合にも、各 *matai* は、各々のリーダーシップのもとに拡大家族的な大世帯——その人員構成は親子・キョウダイ・イトコなど無系的に共通の先祖をもつ人々に配偶者及び子どもたちを加えたものである——を営むのである。今日ではそれは20人程度であることが多いが、かつてはもっと大人数を含むものであったはずで、Turner によれば50人を上回ることもすらあったらしい [TURNER 1884: 173]<sup>5)</sup>。

*matai* の 'āiga 内での役割は、'āiga で暮らす人々の労働および資源、作物を管理し、采配をふるうことである。'āiga 構成員は老いも若きも、多くは *matai* の指示に従って、またときには自発的に、できる範囲で 'āiga に貢献するのが原則である。'āiga 構成員は *matai* の指示どおりに行動している限りにおいては、この〈共同体〉を追い出されることはなく、したがって寝食をおびやかされることはない。'āiga は寝たきり老人・身体障害者など我々の社会で福祉がカバーしている人々までをも引き受けるのである。

5) 1920年代頃からニュージーランド植民地政府の政策により、*matai* 称号をもたない中年既婚男子は *matai* の直接的支配を逃れて、一家を構えて半独立の経営体を営むことが多くなってきた [KEESING 1934: 271-277]。彼らは特定 *matai* に *tautua* (奉仕) をする義務をもつ。即ちその *matai* の求めに応じて財を供出したり、*sua* と呼ばれる儀礼的な食物の捧げ物を彼に対して行わなければならない。

'*āiga* の大家族的共同生活を維持するために *matai* に委ねられているのは、単に経営者としての管理運営業務の計画をたてることだけではなく、むしろ細かい行動を指示することである。サモアの若い人々というのは、*matai* の手足となって働くために、自主的に行動することが少ないし、またそういう能力を訓練されてもいない。称号を授与される以前の若者は徹底して *matai* の指示に従って行動すべきだ、またそうでない行動などとれるはずがないと人々は考えている。*matai* になってこそ人間は一人前であるが、それ以前は子供なのだ。したがって若者のモラルに関しても *matai* は監視の目を光らせなくてはならない。夜這いなどに رفتり、盗みを働いたりして '*āiga* の名を貶めないようにし、しっかり監督するのは *matai* の仕事の一部である [山本真鳥 1986: 127-129]。

そうした '*āiga* 内部の統制に加えて、*matai* は村や地方の集会 (*fono*) や儀礼などにおいて '*āiga* の代表としての役割を果たす必要がある。単に出席するだけの場合もあるが、演説、カヴァ飲用、食物や交換財の分配など、その称号名に定められた任務を様々な政治儀礼的場面にて遂行するのは、*matai* の重要な役割のひとつである。

さらに、様々な儀礼の場において儀礼交換 (*fa'alavelave*) を処理していくのは、20世紀前半においてどうであったかを細かに文献によって追跡することができないものの、少なくとも今日では *matai* の重要な役割となっている。筆者は、サモアの儀礼交換の研究を通じて、これら儀礼交換がかつては特定の格の高い首長の '*āiga* に関してもっぱら行われたはずで、これが首長称号の平準化にもなって、庶民である普通の *matai* にまでも拡大されてきたと考えている。恐らくは20世紀前半を通じて、次第次第に一般の '*āiga* にまでも拡大されてきたのであろう。ひと月に何回か、ひどい時には1週間に1~2回もある儀礼交換のために、ブタや現金、細編みゴザなどを捜す仕事は、少なくとも今日の *matai* の、大変だけれども重要な職務のひとつとなっている。

さて、このような役割を果たしている *matai* はどのようにして選ばれるのであろうか。サモアの首長称号継承が、トンガのように長男から長男へと、あるいは東ポリネシアのように男女を問わず長子から長子へと自動的に伝えられるものでないことは、初期の研究者の記述でもしばしば注目されている。次に誰が *matai* となるかは '*āiga* に血縁を辿ることのできる人全て ('*āiga* から婚出してしまった人の子孫も含めて) の参加する集まりで、全員の合意の下に選ぶこととなっている。今日と比べた時、かつては *tamatāne* (父系的メンバー：字義通りには男性の子孫) が、ほぼ独占的に称号へ接近することが可能で、*tamafafine* (女性メンバーの子孫。二次的に *matai* になる権利をもつ) にあまりチャンスはなかったといった違いがみられるようである。1920年



代にマヌア諸島で調査をした Mead は、*tamatāne* の主導的権利に対して、*tamafafine* は拒否権をもつと述べている [MEAD 1969: 18] し、ドイツ領サモアの初代高裁長官を務めた Schultz も *tamafafine* に順番が廻ってくるのは、*tamatāne* に適任者がいなかった時だけであるとしている [SCHULTZ 1911: 51]。しかし、*tamatāne* の仲間内でだれが称号を得るのかといった順位は、どうもかつてより一義的には決まっていなかったらしい。19世紀に活躍した宣教師 Turner は「息子が継ぐかもしれないが、叔父や従兄弟や、時には全くの他人に与えられることもある」 [TURNER 1884: 173] と記している。

また Schultz によれば、長男が継承すると決まったわけでもなく、父の称号名を息子が継ぐとも限らず、死者の弟が継ぐこともあり、さらにその次の代には叔父から甥へ渡されることもあったようである。先代の *matai* は、これと思う若者に継承させたいという意志を表明することはできるが、いつもその遺言 (*māvaega*) が聞き届けられるとは限らない。*'āiga* の集まりはその遺言を参考にするが、異なる決定を下すこともできるのである。また場合によっては養子に称号が与えられるという [SCHULTZ 1911: 53]。

このような *matai* 選出に関する柔軟性は、サモアの首長システムの大きな特長であり、これゆえに、世界中で同時進行している民主化の流れの中でこのような〈封建的〉システムが生き残ることができたといっても過言ではない。西サモア独立に際してサモア人代表は、これは我々の文化であり我々のやり方なのだと主張したが、それから20年を経たのちのインタビューでも政治リーダーたちは、このシステムがサモア文化のコンテキストにおける民主主義であることを強調していた。すなわち *matai* システムは、継承方法の硬直化による愚かなリーダーを奉る必要がなかったし、また *matai* 選出方法の民主性、つまり家族の中から管財人 (*trustee*) としての代表を選び、代表が代表を選んでいくのだという、一種の代表制システムであることを主張することにより、システム自体を現代に適応させることができたのである。

そして恐らくは今日の *matai* 選出方法も民主化をさらに倍増させた形へと変容してきているように思える。今日、土地・称号裁判所で *matai* 継承をめぐる裁判の大まかなガイドラインとなっているのは、第二次大戦後間もなくより十数年同裁判所で長官を務めた Marsack の『覚書』 [MARSACK 1961] である。これによれば、20世紀初頭の *tamatāne* と *tamafafine* の権利上の相違は *filifiliga* (称号の継承ラインに近い人々) と *tāupulega* (称号の継承ラインから遠い人々) に置き換えられている [MARSACK 1961: 7]<sup>6)</sup> し、女性の称号保持も法廷はこれを妨げないとしている。実際に今日の法

廷では、*tamatāne*/*tamafafine* の法的権利上の区別は行わないとのことである [1978年頃同裁判所の登記官 (registrar) であった Tuiletufuga Enele 氏との談話]。つまりは伝統的規範における男/女の法的権利上の差異を現在ではなくすようにしているということだ。

それでは実際に、*matai* 選出の際のガイドラインとは何であろうか。第1に、血縁関係であるが、この柔軟性については先に記した。Marsack は養子に加えて、さらに婚入してきた男性も挙げている。もっとも '*āiga* 内に意見の相違があるとき、裁判所の側からそうした人々を *matai* に指名することは避けるのだそうだが [MARSACK 1961: 11]。

第2には、多面的な意味での奉仕 (*tautua*) である。まずは、先代 *matai* に対してどれだけ奉仕をしたか。奉仕には様々なやり方があるが、*matai* が村の行事などで必要な食物を調達するのに協力したり、日常的に *matai* に食物などの届物をしたり、教会に献金したり、*matai* の命令に従って農作業をしたり等々が挙げられる。また村や地方などの地域に対しての奉仕もこれに含まれている。そうした奉仕は、村に住み込んで行われる性格のものであり、また *matai* 就任後も引き続き村に住んで、'*āiga* の面倒をみるのが前提となっている。

第3に称号への適性がある。*matai* となる人は、その '*āiga* の故事、系譜等、諸々の知識に秀で、かつ演説や儀礼などサモア固有の習慣に長じている必要がある。また彼が *matai* となったために '*āiga* 内に争いが多発するようではいけないし、村の他の *matai* たちからも反感をかうことのないような、温厚かつ尊重される人柄でなくてはならない。

第4に先代 *matai* の遺言がある。これは先に説明した通りである。

以上は、称号の継承に関して '*āiga* 内に争いがおこった時に、裁判所がいかなる人物に称号を授与するかというガイドラインであるが、もしも '*āiga* 内での合意が得られた時には、この範囲外のこともある。しばしば '*āiga* の血縁者を通り越して、養子や婚入者に対して称号授与が行われるし、また合意さえ成立すれば、それは全く赤の他人に対してでも構わないのである。近年特にしばしば、仲良くなった外国人に敬意

6) しかしながら、Marsack は明確に *filifiliga* と *tāupulega* を区別することは難しいとして確言を避けている。もともと *tamatāne* と *tamafafine* の区別は血縁関係によって称号継承の順位を定めたルールであるが、*filifiliga* は継承ラインに近い人、*tāupulega* は遠い人、というのは同義反復に過ぎず、裁判所のガイドラインの覚書としては余りに曖昧であるといわざるを得ない。しかしそれは、血縁よりも奉仕が重視されるようになった傾向を物語っており、また男性の子孫か女性の子孫かが称号に対する権利を区別するメルクマールとなりにくくなっていることを示している、と解釈してよいと筆者は考えている。

を表して、ないしは何らかの（例えば一方的に与えられた金品に対する）お礼として称号を授けることがある。土地・称号裁判所では外国人が称号を保持することを認めていないので、正式な登記<sup>7)</sup>をすることはできないし、耕地や宅地の使用を行うこともまずないので、これは実質的価値のない名誉称号的なものに過ぎない。もともと *suafa* 称号（土地所有をとめない、*'āiga* が称号授与の主権をもつ称号。称号保持者は *matai* と呼ばれる）とは別に、*ao* と呼ばれる形式の称号があるが、これなど土地所有を伴わず名誉だけあるというもので、外国人に贈られた *suafa* 称号はこの *ao* 称号に相当する性格をもつ。しかし、同じサモア人同士でも、村に教会を建ててくれた大工にお礼で授与した（実際には礼金が充分用意できなかったからその代わりだ、という陰口もあった）ケースも耳にした。

このように広い範囲における称号授与は、最近頻発しているとはいえ、伝統の延長線上にあることに注目すべきである。

### Ⅲ. 西サモアの最近の都市化

さて、称号分割と最近の不在 *matai* の急増という事態についての具体的なケースに入りたいが、その前にこの節では西サモアの都市化の概略を述べておこう。

サモアには、伝統的に村の連合としての地方の中心となる格の高い村（首村）が存在する。例えばウポル島は東西に3つの大地方に分かれているが、その東側の3分の1を占めるアツア (Atua) 地方の首村はルフィルフィ (Lufilufi) 村であり、西側のアアナ (A'ana) 地方の首村はレウルモエガ (Leulumoega) 村である。中央のツアマサガ (Tuamasaga) 地方にはマリエ (Malie) 村とアフエガ (Afega) 村の2つの首村が、この地方の中心として互いに相互補完的役割を果たしている。

しかし、現在の首都アピアはそのような伝統的中心とはかかわりなく、むしろ東西に延びたウポル島の北岸中央にあり、船舶用に湾をもち、西サモアで唯一の平野部にあるという地形的条件から、商業を目的として19世紀の半ばに西欧人がつくった町なのである。コプラ買付けや見返りとしての商品を売るために、西サモア内はもろろんのことクック諸島やエリス諸島まで行くコプラ・スクナーの基地として大いに栄えた。

7) *matai* 登記は、現代の婚姻を行政が管理するのと同種の、政府によるコントロールである。婚姻が政府に届けられていなくても、結婚式を挙げた男女や共に長く棲んでいる男女を人々はしばしばカップルであるときみですが、それと同様に登記がなされていなくても *saafa'i* と呼ばれる *matai* 就任式を行ってれば、人々は *matai* であると認定してくれるのである。しかし、内縁の妻が受ける法的保護は徹々たるものであるのと同様、登記されていない称号保持者のうける法的保護はほとんどない。

19世紀の終わりからは、アピアは商業の中心であるばかりでなく、常に西サモアの植民地政府が置かれていたところであった。要するにアピアはおよそ伝統文化の対極に位置する町であり、サモアの近代化をリードする先駆けをいつも務めていたのである。

そうした西サモア唯一の都市であるアピアは、かつてはもっぱら白人や白人と結婚したサモア女性、そしてその子供たち等の住む商業の町で、政府に勤めたり白人の家のメイドや下男を勤める若干を除く普通のサモア人にとっては、役所に出頭したり、買物をしたりするときだけ来るところであった。しかしいつの頃からか、現金収入や教育、生活水準の向上を求めて、また西欧文化に憧れて村を離れて住むサモア人もでてくるようになった。

アピアに住むということは、宅地を買ったり、借地したり、あるいは借家することである。自給自足的なタロイモ・バナナなどの栽培に食物を頼ることは用地の確保の問題からまず難しく、また用地がある時も家人がみな職業に就いていたりして、現金収入依存型の生活を営むケースがほとんどである。都市の生活はそれなりに難しいことも多いのに、人々がその自由さや娯楽・活気に憧れるのはいずこも同じで、アピア首都圏——この統計に用いられているのは、ヴァイシガノ (Vaisigano) 西区とファレアタ (Faleata) 東区の両選挙区を併せた範囲である——の人口も間断なく増加しつつある。表1に示したのは、年度毎のアピア首都圏および西サモア全体の人口で、アピア首都圏への人口の集中具合を知ることができる。今日アピア首都圏には人口の約5分の1が集中している。最近では道路の建設からバス交通網の発達が著しく、特にアピアから北岸を西へいくルート沿いの村々はベッド・タウン化している。その意味ではアピア首都圏の人口集中のスピードは弱まってはいるものの、アピア首都圏は実質的にさらに拡大しているということもできるだろう。

さてそうした西サモア国内の都市化に加えて、さらに国際的規模での都市化がある。出稼ぎを含む移住・移民の流れである。西サモア人のニュージーランド移住は第二次大戦後に飛躍的に増大した。表2は、ニュージーランド政府の国勢調査に表れたニュージーランド在住サモア人の統計である。西サモア国内の16万人に対して、ニュージー

表1 アピア首都圏の人口と西サモア総人口に対する比率

	1956	1961	1966	1971	1976	1981
アピア首都圏人口 (a)	18,153	21,699	25,480	30,261	32,099	33,170
西サモア総人口 (b)	97,327	114,427	131,377	146,627	151,983	156,349
(a)の(b)に対する比率 (%)	18.7	19.0	19.4	20.6	21.1	21.2

[WESTERN SAMOA GOVERNMENT 1967, 1982]

ランドにその4分の1以上にあたるサモア人がいるということは大変なことだ。一方のアメリカ領サモアは、住民が合衆国国民<sup>8)</sup>として合衆国に自由に入ることができるため、西サモア人のニュージーランド移住よりさらに進んだ都市化の状況を呈している。国勢調査の際に、ニュージーランド程に細かい民族別質問項目のない合衆国では、どれだけのサモア人が実際に居住しているかについて正確な統計データをもたないが、アメリカ領サモアの人口約3万2千人(1980年国勢調査)に対して、ある推計によればその3倍近くのサモア人が合衆国に居住しており、約6万5千人が西海岸に、また2万人がハワイ州に住む

という[PACIFIC PUBLICATIONS 1984: 39]<sup>9)</sup>。もともとアメリカ領サモアのほうが賃金も高く、親戚もいてたやすく行けるため、ここに出稼ぎに来る西サモア人も多く、当地を媒介にしてハワイ・西海岸に移住している西サモア人も決して少なくないようだ。ニュージーランド、合衆国が目下のところ、西サモア人にとってもっとも移住が多い国であるが、他にもオーストラリアやカナダへの移民が増加中である。

さてこのような急激な移民の増加が社会にもたらす影響は、もちろん計り知れないものがあり、matai システムの変容とどう関わるかが小論の課題である訳だが、ここにひとつだけ、海外移民の送金のデータを示しておこう。表3は、西サモアの輸出入と私的送金の総額が示されている。全体に額が飛躍的に大きくなっていくが、それは79年以降の漸次的な外貨切り下げによるところが大きく、80年から84年にかけての切り

表2 ニュージーランドに居住するサモア人

1936	362
1945	716
1951	1,336
1956	3,740
1961	6,481
1966	11,842
1971	22,198
1976	27,747
1981	42,078

[PITT and MACPHERSON 1974: 119; NEW ZEALAND GOVERNMENT 1973, 1985]  
(ただし、自己申告による国勢調査データ)

表3 西サモアの輸出入総額と私的送金額、及び送金額の輸入額に対する比率

	1970	1972	1974	1980	1982	1984
輸出総額(100万ターラー)	3.4	3.5	7.8	16.2	15.8	34.8
総輸入額(a) ( // )	9.8	15.6	17.5	57.2	60.0	100.8
私的送金(b) ( // )	2.0	2.8	5.9	17.2	22.6	41.0
(b)の(a)に対する比率(%)	20.4	17.9	33.7	30.1	37.7	40.7

[WESTERN SAMOA GOVERNMENT 1975, 1984]

8) 合衆国国民(U.S. National)は合衆国市民(U.S. Citizen)と異なり、選挙権をもたないが、合衆国のパスポートを支給されて国内を自由に移動することができる。  
9) しかし、太平洋の人口移動について長く研究しているConnellは、アメリカ合衆国のサモア人人口に関して、44,000人(アメリカ領サモアからは24,000人、西サモアからは20,000人)とこれとは相当差のある数字を推計している[CONNELL 1987: 377-378]。

下げ率は86%にも及ぶ程である [山本泰 1987: 314]。しかしそれを差し引いてもなお送金額は相当増えているし、驚くほどの入超が続く中での西サモアの経済の悪化とも関連して、1970年代後半を境として送金が輸出額を凌駕する程に増加していることは注目しておきたい。

西サモアの識者はしばしばこうした状況について、「我々は何も輸出するものを持たないから人を輸出している。親は子供を輸出して代わりに送金してもらうのだ」と自嘲しながらいう。実際、海外に住む兄弟姉妹や子供をもたない世帯はほとんどなく、またそうした人々からの送金なしで暮らしの成り立っていることも少ないのである。日常的な暮らしにおいて海外からの送金に頼ることはまずないが、しかし、儀礼交換や教会行事に際しては手紙を書いて送金を頼むことがしばしばである。また、クリスマスなどの行事に際しては移民の側から自発的に送金することも多いし、家を建てるなどの物入りにも送金は付き物である。また西サモアに居住する親戚を招いたり、訪問してくる親戚の滞在中の費用からお土産まで面倒をみたり、帰国に際して近親者への金を託したり、と統計に表われない援助も相当ありそうだ。

それでは、*matai* システムの変容の問題に再び入ろう。

#### IV. 称号分割と不在 *matai* の増加

さて、伝統的にサモアには *matai* を広い範囲から補充することが可能であったことを前々節において検討したが、ここではさらに称号分割という、*matai* の数を増やしていくサモアの首長システムに固有のメカニズムについて考察してみよう。

西サモアが、*matai* のみが国会への代表をおくる選挙・被選挙権をもつという現代では珍しい制度をもつことについては先に記したが、これは国連信託統治領から独立する際に、民主主義の実現のために普通選挙を条件としていた国連に、様々な働きかけを行って特別に認めさせたものである [DAVIDSON 1967: 349-411]。しかし、一方この制度を逆手にとって、*'āiga* 内において、*'āiga* の合意を楯に *matai* の称号授与をどんどん行い、*matai* の数を増やすことによって選挙に勝利をおさめる試みがなされるようになった。最も有名なのは、ヴァイシガノ第一 (Vaisigano no. 1) 選挙区であるが、1964年の選挙では投票数が108であるのに対し、3年後の1967年には1295に急増しており、相当数の人々が選挙のために *matai* の位に就いたことを示している<sup>10)</sup>。

*matai* を増やす際に、*'āiga* 内で空位となっている称号名を探し出すこともあるが、それ以外にしばしば行われたのは、称号分割 (title splitting) という方法である。称

号分割とは、本来ひとつの称号名に就く *matai* はひとりしか存在しないはずであるのに、*'āiga* 内での意思統一が図りにくい等の理由から、2人以上に同一の称号名を与えることである。Marsack は次のように述べている。

「1957年7月に公表された *matai* 登記簿によれば、例えばサバパリイ (Sapapali'i) 村には21人の Papali'i 称号の保持者が、またサツパイテア (Satupa'itea) 村には20人の Asiata 称号の保持者が、またサラニ (Salani) 村には17人の Fuimaono 称号保持者がいる。この習慣は広範囲に行われており、事実、西サモアのどの村にも見出すことができる。

特定称号への複数の指名が家族の繁栄に何らかのかたちで関係するどころか、*faipule* (国会議員) 選挙の有権者数を増加させるため以外の何ものでもないケースもある。そしてそれは村の *matai* たちの集まりからの要請であることも多いのだ」 [MARSACK 1961: 8]。

この時代から既に、選挙対策としての称号分割が行われていたことが伺えて興味ぶかいが、一方称号分割は決して新しい発明ではなく、古くから行われている正統なるサモアの習慣であることも注目しておくなくてはならない。Keesing は1934年に既に、この称号分割がしばしば行われるようになっていることに注目し、無闇な称号分割に警告を発している [KEESING 1934: 245-246]<sup>11)</sup>。

西サモアの各村でフィールドワークをすると、村の最高位首長 (*ali'i sili*) がしばしばひとりではないことに驚かされる。まず *'āiga* 全体はその最高位首長の称号名を頭とするいくつかの分枝 (branch) に分かれていることが多い。これら分枝は *itū pae'pae* (もしくは *fuai'fale*)<sup>12)</sup> と呼ばれている。それらは、決して最近の選挙制度により増加させられたものではなく、かなり昔から存在していたようである。

例えば、Krämer の系譜によれば、アアナ (A'ana) 地方の *Sātuala family* の初代

10) さすがにこの選挙対策はサモアの議会でも問題となり、67年の選挙をピークとして、選挙対策を目的とした称号授与は厳しく取り締まられるようになり、73年の選挙の前には、大量の *matai* 称号授与無効の裁定が裁判所で下されることとなる。この経緯は S. Tiffany の論文に詳しい [TIFFANY 1975]。

11) 称号の格式・価値は、確かに貨幣と同じく稀少性に負うところが大きい。従って無闇に称号授与を多発することは、インフレと同じく称号の威信の低下という危険を招く恐れがあるという主張は正しい。とはいえ、称号の数が今世紀初めより急激に増加していることは確かだが、人口も同時期には急増しているのである。総人口に対する *matai* 数の比率は、1904年より1980年まで7から9パーセントの間を動いており、それ以後はやや上昇気味ではあるが、1988年2月の選挙時でも、10パーセントを少しばかりこえた程度である [PITT 1970: 69; WESTERN SAMOA GOVERNMENT 1980; SAMOA TIMES Feb. 19, 1988]。

12) *itū pae'pae* も *fuai'fale* も *'āiga* の分枝であるが、*itū pae'pae* の方が独立性が高く、互いに相手の分枝内の意志決定に意義をとる余地はない。

Aiono 称号の保持者とみなされる Aionolevave には3人の妻がいて、その最初の結婚、すなわち Amituana'i の娘の Iliganoa からは, Tuala と Tuaifaiva の2人の息子を、またレウルモエガ (Leulumoega) 村の Alipia の娘 Togitoto からは Su'amatai'a を、さらにおなじレウルモエガ村の Ogatai の娘 Filitua からは Aionofina'i を得たとの記事がみえる [KRÄMER 1902 Band 1: 177]。今日 Sātuala family の Leaupepe と Aiono の2称号を最高位首長と仰ぐファシトオウタ (Fasito'outa) 村において Aiono の 'āiga には Aiono Tuala, Aiono Su'amatai'a, Aiono Fina'i の3つの分枝があることが確認されているが、先の Krämer の系譜と合わせ考えれば、これら分枝がそう最近のものでないことはうかがえる。

また、アツア (Atua) 地方のソロソロ (Solosolo) 村についてみれば、Leota 称号に関して、4つの分枝があることは LMS の *fa'alupega* 集 (*fa'alupega* は地縁集団——地縁組織に属する *matai* の集合——に対面しての儀礼的な呼び掛け。決まり文句としてマニュアル化したハンドブックをかつてはロンドン伝道協会が、今日ではサモア会衆派キリスト教会が出版している) で確認することができる [CONGREGATION CHRISTIAN CHURCH OF SAMOA 1978: 141]。*fa'alupega* では、分枝について言及することは少ないが、Leota Leulua'iali'i, Leota Seiuli, Leota To'omata, Leota Lemusu の4つの分枝が *fa'alupega* の中に明記されているということは、この分枝がかなり古いことを示しているのかもしれない。

これら *itū paepae* (ないしはそれより下位の *fuai fale*) と呼ばれる分枝レベルの称号分割は、各々の称号が主権 (*pule*) をもつ宅地・耕地があり、自律的な親族組織である 'āiga をそれぞれに率いている、という意味では、'āiga 組織の増殖作用にすぎないといえなくもない。すなわち 'āiga の人口増加にともない、'āiga 運営の限界が生じて 'āiga そのものが枝分かれをしたのであって、称号分割はむしろその結果なのである。それに対して最近の称号分割は、宅地・耕地の分割を含まず、称号名のみを共有する

表4 サマメア村とファガフェウ村の在地並びに不在 *matai* 数の移動

		総人口	在地 <i>matai</i>	不在 <i>matai</i>	(#1, #2)
サマメア村 (ウポル島)	1965	135	5	5	(5, 0)
	1980	95	7	13	(11, 2)
ファガフェウ村 (サヴァイイ島)	1965	176	14	1	(0, 0)
	1980	206	26	16	(3, 6)

[藪内 1967: 22-23; 杉本 1982: 161-165]

(ただし #1 は不在 *matai* 中のアピア在住者, #2 はニュージーランド在住者)



ものである。そしてこうした急激な称号分割には、不在 *matai* の著しい増加を加えて考察する必要がある。1965年にウポル島のサマメア (Samamea) 村とサヴァイ島のファガファウ (Fagafau) 村で藪内と共に調査を行い、さらに15年後にも再調査を行った杉本は、その *matai* 数の推移を報告し考察している [藪内 1967: 22-23; 杉本 1982: 161-165]が、これはサモアで同じころ進行した不在 *matai* 増加の現象を端的に物語っている。表4はその報告から小論の論旨にそって筆者が制作したものである。双方ともに *matai* 数の著しい増加とそれに伴って不在 *matai* が増えていることがよくわかる。以下に、筆者がフィールドワークの先々で見聞した、称号分割のケースを3つばかり挙げて考察してみよう。

### 1. A村のN称号

A村は自らを含む4つの村の *tulafale* たちが選出することのできる *ao* 称号 M を最高位とする村であるが、名誉称号的性格の強いMは政治的には余り意味をもたず、むしろかつてのM称号保持者の息子から生じたN称号がMを除く *ali'i* としては最も格が高いと同時に実質的権威をもっているのである。さてN称号はかつてより、4つの *itū paepae* (分枝) に分かれていたのであるが、筆者が調査を行った1979年初頭の段階で、各々に相当な数の称号分割が生じていた。全体でこの村からN称号を授与された人は25人に上っていたにもかかわらず、この村に在住しているのはたった5人、他の称号名で呼び倣わされているがN称号も授与されているという人を含めてたったの6人であった。

N称号が、かくも大勢に分割されている原因は色々あろうが、この称号名がこの村でMを除いては最も重要であるにもかかわらず、配下の *matai* 称号が全く存在せず、したがって *'au'āiga* 形式を全くとらないことが大きく関連していると思われる<sup>13)</sup>。お互いの *itū paepae* 同士がいかなる系譜的關係に立つのかについては、残念ながらデータをもっていないが、ここでは各々の *itū paepae* 内の状況を示すだけで充分であろう。

まず *itū paepae I* について。この *itū paepae* は現在9人の *matai* が存在する。これらの *matai* をそれぞれに **Ia**, **Ib**, **Ic**, **Id**, **Ie**, **If**, **Ig**, **Ih**, **Ii** と呼ぼう。この9人のうちでこの村に居住しているのは **Ia** と **Ib** のみである。(以下、在地 *matai* は太

13) この村は一体に *'au'āiga* 形式をとる *'āiga* が存在しないが、それが村として特に例外的であるというわけではない。これは *ao* 称号を頭とする村であるせいか、それとも単にシステムが破綻しているのか、それともひとつの村の存在様式なのか、現在は断定せず将来の課題としたい。

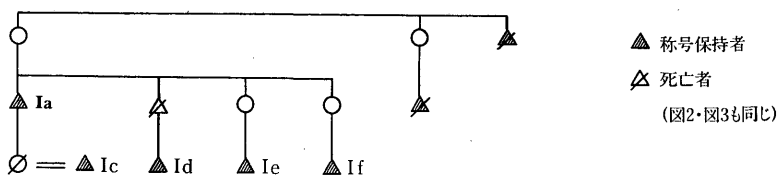


図1 'āiga Sā N, itū paepae I

字で示す。) **Ia** は60代後半で、全部で5人いるN称号の在地 *matai* の中で最も高齢であり、この 'āiga 全体を代表して *matai* の集会 (*fono*) で演説をしたり、カヴァを飲んだりの役をもっぱらに行っていた。もうひとりの **Ib** はほぼ50才、*matai* 集会でもそれほど目立つ存在ではない。その他 **Ic**, **Id** は隣の村に、**Ie**, **If**, **Ig** はウポル島のアピア市ないしその近郊、残りの **Ih** はニュージーランド、**Ii** はアメリカに各々住んでいる。集めえた限りの系譜関係によれば、**Ia**, **Ic**, **Id**, **Ie**, **If**, **Ih** の6人は近親者から成っており (ただし **Ih** の系譜関係は正確には不明) (図1), この人々がこの *itū paepae* の核を構成していることは間違いなさそうである。人々の噂では、**Ib** は父の称号であるP称号を継ぐつもりであったが、'āiga 内の意志統一が図れずに、仕方なく遠縁の **Ia** に頼みこんで称号名のみ約束でN家の *matai* にしてもらったのだということだった。村を上げての教会落成式が行われた時、ニュージーランド在住の **Ih** を除く **Ia** を核とする近親 *matai* たちは、**Ia** の下に結集して一大 'āiga として儀礼交換を行ったのである。**Ii** と **Ig** の2人についてみるなら、この大きな行事に参加することもなく、また調査期間中筆者と顔をあわせることもなく、不在 *matai* の中でも最も名ばかりのものであるといえそうだ。

次に *itū paepae* II。この分枝は **IIa**, **IIb**, **IIc**, **IId** の4人の *matai* が存在するが、そのうち **IIa**, **IIb** の2人が在地 *matai* である。**IIa** は父もその養父もこの 'āiga の *matai* であり、彼を核とするこの *itū paepae* の **IIc**, **IId** は各々 **IIa** の妹の夫とまた別の妹の息子であるが、2人とも別の島に住んでおり、病気がちの **IIa** とは付き合いも薄く、*matai* でありながらこの 'āiga の名声や繁栄を充分顧みているとはいいがたい。**IIb** は **IIa** の友達であるが、様々な事情から落ち着くべき 'āiga をもたずにいたので、**IIa** がこの 'āiga の *matai* にしてやり、落ち着ける場所を提供してやったのである。これは赤の他人でありながら、よく *matai* を助けた (*tautua*) ために、*matai* が彼の努力を評価してさらに協力を引き出すために称号授与を行う、という方式の称号授与のバリエーションといってもよい。本来ならば配下の称号名を贈るところだが、ないものは仕方がない。**IIb** は **IIa** の期待通り、儀礼交換等の際にはしっかり 'āiga のためにつくしているようであった。

さて *itū paepae* III。この *itū paepae* に含まれているのは、III a, III b, III c, III d, III e, III f, III g の7人の *matai* である。この *itū paepae* の特徴は *matai* の

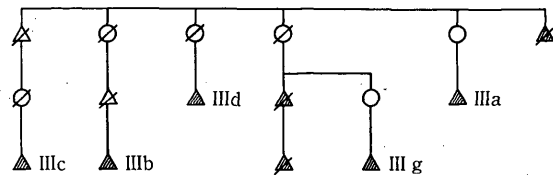


図2 'āiga Sā N, *itū paepae* III

みならず 'āiga 全体に牧師や教師など高等教育を受けた人が多く、今ではだれひとりとしてこの村に常住している者がいないということだ。III aはこの 'āiga の代表者といってよかろう。政府奨学生として外国で学んだエリートであるが、専門学校教師としての仕事に飽き足らず、この 'āiga の *matai* 称号を得て議員に立候補し、1970年より1期議員を務めている<sup>14)</sup>。その後、諸々の事情で調査の時点では再当選が果たされていなかったが、政治家志望には変わりなく、村を時折訪れては村の人々に土産を配ったり、教会に多大な献金をしたりしていた。一方、III cはアピヤ国立病院の医師として活躍している。さらに III fは総理府の役人としてこれもアピヤ市で活躍中であり、誰も住んでいないものの、耕地のすぐ近くに家を所有していた。*matai* の称号をもてば、自らの名に付いてくる土地の他に、村の境界内の処女地を耕して自分の土地とすることができるが、III fは人を雇って自らの名で処女地の開墾を行って輸出タロイモを栽培する企業家でもあった。その他 III eは隣村に、III b, III dはサヴァイイ島のよその村に、また III gはアメリカ領サモアのツツイラ島に住んでいる不在 *matai* である。同じころ行われた教会落成式では III a, III b, の2人と 'āiga 構成員の牧師1人<sup>15)</sup>が参加して他の不在 *matai* の名において行われるものも含めて盛大な儀礼交換を行い、大工への報酬を集めた時も、III aの名において行われた財の供出は、この村の牧師を除く最大であった。この *itū paepae* の III a を核とする近親の *matai* たちの親族関係は図2に示した通りである。

最後に *itū paepae* IV。この *itū paepae* に属す *matai* は IV a, IV b, IV c, IV d, IV e の5人である。IV a と IV b ——もともと後者は他の 'āiga のリーダーとして他の名前 *matai* として活躍中であるが——を除けば皆、不在 *matai* であるとはいうものの、IV e 以外は隣村に居住しているため、さほど疎遠ではない。また最近亡く

14) こうした外国帰りのエリートが、やがて郷里や縁故のある 'āiga の高位称号を手に入れ、国会議員に当選する、という傾向は次第に顕著になってきている。かつては議員といえは、村や地域の高位首長に限られており、サモアの伝統文化には明るいけれども今日の国際政治を始めとする西欧世界のシステムには疎いのが普通だったが、そうした西サモアの国会の雰囲気も変化してきた。

15) *matai* 称号はもたないものの *matai* 並みの敬意を表される。

表5 A村のN称号保持者/*itū paepae* 毎の *matai* 数とその居住地

	<i>matai</i> 総数	在地 <i>matai</i>	隣 村	サヴァイ イ島の他 の村	アピア以 外のウポ ル島	アピア 付 近	ニュージ ーランド	米領サモ アと合衆 国
<i>itū paepae</i> I	9	2	2	0	0	3	1	1
<i>itū paepae</i> II	4	2	0	0	2	0	0	0
<i>itū paepae</i> III	7	0	1	2	0	3	0	1
<i>itū paepae</i> IV	5	2	2	0	1	0	0	0

なった IV $\alpha$ ——隣村の *ao* 称号も併せもち国会議員として活躍していたため、この村に居住していないのに、在地 *matai* のそれを遙かに凌駕する物資を村の行事に供出していた——および IV $\beta$  は、両世帯ともにまだ後継者がきまっていないため、その延長上で旧 *matai* の名において村に対する供出を行っていた。4つの *itū paepae* の内では最もこの村に根を下ろしているといってもよいかもしれない。残念ながら、この *itū paepae* の *matai* の系譜関係は不明の点が多い。

以上のN称号の称号分割において、*itū paepae* 毎に事情は様々であるものの、概略をまとめたのが表5である。総数25名のN称号をもつ *matai* のうち、在住者は6人、近隣に住む人も含めて11人しか呼べば聞こえる範囲にはいない。ちなみに当時のこの村の人口246人（1976年センサス）に対して登記している *matai* 称号の総数69、重複を除けば計65名の *matai* がいるが、このうち半数を超える36名が当地には住んでいなかった。

## 2. B村のQ称号

この称号名がかつてより多くの同称号に分割されていたこと、また早い時期から選挙対策を目指して称号分割が実行されていたことは、例えば Ala'ilima 夫妻の研究により知ることができる。彼らによれば、1959年に6人いたQ称号保持者は1964年には14人になっていたのである [ALA'ILIMA and ALA'ILIMA 1966: 242]。まずこの称号は隣接する2つの村の各々の最高位称号として QX と QY の名をもつが、各々に独自の称号名起源伝承をもち2つの村に分かれているところを見ると、称号が分割されてから久しいようである。さらに QX は4つ、QY は5つの *itū paepae* をもつ。筆者の調査になるのは後者 QY 称号の *itū paepae* のうちのひとつである。

QY 称号のこの *itū paepae* を *itū paepae* I とすると、この *itū paepae* には1981年現在6人の QY 称号を保持する *matai*——QY Ia, QY Ib, QY Ic, QY Id, QY Ie, QY If——がいるが、その内で核となっているのは QY Ia, QY Ib の親子である。

**QYIa** (称号名就任は1940年。以下カッコ内は就任の年を示す) は70歳を過ぎ、もはや妻を亡くし息子に扶養される弱々しい老人であったが、'āiga の代表者として人々に敬意を払われていた。**QYIb** (1974年) は実質的な世帯の経営者である。**QYIc** (1971年) は政府の役人としてアピア近郊に住み、**QYId** (1974年) とごく最近就任式を行ったばかりの**QYIe** は同様にアピアの民間セクターで働く都会人だ。特に**QYId** はスト

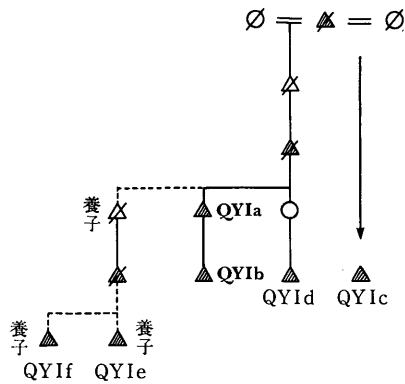


図3 'āiga Sā QY, itū paepae I

ア・マネジャーとして 'āiga の娘や息子を雇ってやったり、その他の就職の面倒をみたりするので、村の他の matai たちも頭が上がらない状態であった。もうひとり**QYIf** は、小島に位置するこの村が本島にもつ土地に家を構え、その土地を耕して生活していた。ここは本島の中学に小島の 'āiga の子供が通う時の拠点でもあった。ここに住む方が格段に便利であるのに、この itū paepae の核たる**QYIa, Ib** 父子が小島に住んでいるのは、この 'āiga にとっての最も格の高い土地がこの小島にあるからで、父子の世帯はここを離れる気は毛頭ないのである。

以上の matai たちの系譜関係は図3に示した。**QYIe** と**QYIf** は、2度養子縁組を繰り返しているのに称号授与をされたということは、'āiga の側からは彼らを仲間に取り入れることにメリットがあったということになるかもしれない。亡くなった彼らの養父もやはりこの称号名をもつ matai であったが、警察に勤めて出世した人で、この地に住むことはなかったようだ。**QYIe** の場合には、何度も儀礼交換に際して財を持ち寄ってきて、称号が欲しい旨の意志表示があったらしい。'āiga が何らかの意志決定のために集まれば、不在 matai たちは**QYIa, QYIb** の都合のいいように決めて結構であるといっているという。

### 3. C村の SāR (称号名Rを頭とする 'āiga)

Rの 'āiga はかつてより2つの itū paepae に分かれ、さらに各々内部で2つずつの fuai fale と呼ばれる分枝 (itū paepae に比べるとよりインフォーマルな分枝) に分かれており、その4つある分枝にひとりづつR称号をもつリーダーが存在していた。このひとつの分枝である fuai fale I は **RI** に率いられる 'au'āiga であったが、**RI** は老齡

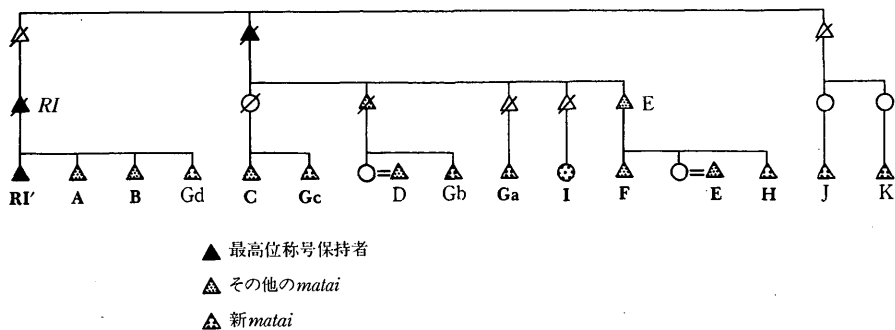


図4 'āiga Sā R fuai fale I

のために亡くなってしまった。この結果この 'āiga は、称号の継承者を誰にするかで大いにもめ、土地・称号裁判所へ裁きがもちこまれるが、結局 RI の長男の RI' を裁判所が指名し、彼が就くこととなった。この間立候補した3人にこの名を分割しようということで 'āiga 内はまとまったが、同じ itū paepae 内の異なる fuai fale に属す R 称号の保持者はこれに同意せず、この計画は実現しなかった。

RI' の称号就任は79年暮であったが、年が明けてすぐ、すでにいる6人の matai に加えて RI' は新しく8名にRの配下となる称号名を授けた。R 称号に関しては、もう一方の fuai fale の同意が必要となるが、R が配下の称号名を授ける限りにおいては称号分割も RI' の一存で構わない。もっとも fuai fale 内である程度の相談は行うのではあるが。

この 'au'āiga ではかつてより、住んでいる人々の生活を守る形での称号授与、すなわち在地メンバーに対する授与しか行われていなかった（とはいえ、そのうち1名はハワイに移住して不在 matai となっていた）が、この大量の称号授与で、計15名の matai のうち4名が不在、そのうちの2名はハワイ及びニュージーランド在住となった。ちなみに同じ itū paepae に属すが fuai fale を異にする 'au'āiga には13名の matai がいたが、いわゆる afakasi ファミリー（白人との混血一族）<sup>16)</sup>に属しながら R 称号をもつ最高位 matai が既にニュージーランド在住であり、他にニュージーランドに住む matai が1人、首都圏に住むのが2人、他村に住むのが3人と不在 matai を7人も抱えているのだった。

16) half caste (混血) がサモア語化したもの。外国人、特に白人との混血によって生じたファミリーであるが、単に人種的に混血なのではなく、ライフ・スタイルなどに西歐的なものを大きく受け継いでいる。彼らはバイリンガルのが多く、植民地時代より政府の役所に勤めたり、商業に従事したりして、一般のサモア人に比べると金持であり教育もあった。afakasi にはかつてより名誉のために matai 称号を授けるといことが行われてきた。

このR称号をリーダーとする 'āiga は、'āiga の分枝に各1名のRをおくだけの称号分割しかしていないが、実際には、Rの配下とされる多くの称号名を必要とする人々へ授与することにより、配下の *matai* の数を確実に増やしてきたのである。特にR称号の初代保持者の個人名Gを称号名とする *matai* は、この *itū paepae* では計6人もいる。

このケースで注目すべきは、分枝間のバランス感覚が称号分割に拍車をかけるということである。ひとつの *itū paepae* (ないしは *fuai fale*) 内で、称号分割をせずにまた不在 *matai* をつくらずに格式を維持しようとしても、対を構成する別の *itū paepae* (ないしは *fuai fale*) が大量の称号授与をやったのけると、なかなかその方針を守るのは難しい。必ず *itū paepae* (ないしは *fuai fale*) 内の *matai* を出していない下位分枝から、文句が出てくるからである。また *itū paepae* (ないしは *fuai fale*) 内の一定の下位分枝に不在 *matai* を許してしまうと、他の下位分枝からの要求にも答えざるを得ない。こうして、*itū paepae* や *fuai fale* 内で公平を保とうとすればするほど、不在メンバーへの称号授与が増えていくことになる。'āiga Sā R の *fuai fale* I で大量の称号授与が行われたことは、同じ *itū paepae* 内の対を構成する他の *fuai fale* で不在 *matai* が既に多く存在していたことと、恐らく無関係ではあるまい<sup>17)</sup>。

以上のように3つのケースを紹介してみた。最近の称号授与の増加はしばしば選挙制度のせいとされるが<sup>18)</sup>、必ずしもそうはいえないことがわかるであろう。称号分割の個々の例からわかるのは、不在 *matai* の称号授与にも様々なケースがあるということである。最も普通に考えられるのは、その村出身であるが、移民・職業をもつなどの理由でアピアやニュージーランドに住み、もはや帰って村に住むことは考えられないが、親や兄弟姉妹などがまだ 'āiga に残り、'āiga とのネットワークが存在している人々である。しかし、親の代から既にアピアに住んでおり、'āiga とはあまり縁がなかったのをお願いして称号名をもらった、または予期しないまま 'āiga から称号を授与された (なにかの贈り物の如くに) という場合もある。また結構多いのは、よその村に住んでいながら 'āiga ネットワークを通じて称号をもらう、というケースであろう。そしてそうした不在 *matai* の 'āiga との関わりも様々なケースがみられる。称

17) 大量の *matai* 称号の授与は、このように一定の弾みがつきだすと止まるところを知らないが、逆に最高位称号を分割せずに孤高を保って安定している 'āiga もある。ao 称号ではないが地方のレベルで敬意を払われている称号にそうしたケースが多い。例としては、レペア (Lepea) 村の Faumuina 称号やロトファガ (Lotofaga) 村の Fiamē 称号が挙げられよう。

18) しばしば Samoa Times や Samoa Weekly などの週刊新聞の紙面に、*matai* システム崩壊の元凶は選挙制度であるとの投書が掲載される。

号名は貰ったもののもうほとんど関わりをもたなくなってしまう *matai* もあるが、町に住みながら毎月のように訪れ、*'āiga* に貢献するばかりか村の人々にもそれとなく物をばらまく代議士志願者もいる。さて次節では、なぜ不在 *matai* が増えるかについての考察を試みよう。

## V. 不在 *matai* 増加のメカニズム

*'āiga* の土地を守りその地に生きる人々は、*matai* がその土地に住むべきであるという伝統的規範と裁判所の意向に背いてまで、*'āiga* の外部メンバー——*'āiga* の不在者——にいったいどうして称号を授与してしまうのだろうか。実際には、もし誰か *'āiga* の1人——称号名が重要なものであれば、*'āiga* メンバーでなくとも村や地方の *matai* でもかまわない——が裁判所にその人物が不在であることを訴え出れば、その称号登記は無効とされる可能性が高いのに、誰もそんなことはしない。*'āiga* システムが生活の基盤である人々、すなわち *'āiga* に居住している人々が *'āiga* の裁定の多くを握っているはずなのに、どうして *matai* システムを崩壊させる一因となりうる、不在者への称号授与を許してしまうのだろうか。この節では在地 *matai* にとっての不在 *matai* を増やすことのメリットと、不在者にとっての *matai* となることのメリットの両側面について考察してみよう。

まず第1に、*'āiga* の在地メンバー、とりわけ在地メンバーを代表する在地 *matai* の立場から。*'āiga* の土地に住み、*'āiga* を経営し、持続していく責任者としての *matai* は、先に示したように、*'āiga* を生活共同体として成り立たせる経営手腕や *'āiga* のモラルをリードする「お父さん」の役割を果たす他に、*fono* 等の儀礼に参加して演説を含む儀礼的役割を滞りなく遂行するための伝統的・儀礼的知識をもち、それに加えて *'āiga* の対面を維持するために儀礼交換に十分な財を集積する能力が必要となってくる。儀礼交換に必要なものは、かつては細編みゴザ (*'ie tōga*) や樹皮布をはじめとした、女性の生産物である女財 (*tōga*) と、ブタ・タロイモなどの食料や武器・道具類からなる男財 (*'oloo*) であった。そのために昔は多くのブタを飼っていたものだし、*matai* が自分の葬式用のブタを長年かけて育てることも多かった。しかし今日では、ブタの代わりに箱入り缶詰や塩漬け肉の樽づめなど現金で入手可能なものを多用するようになり、また食物等の代替物として現金が同じく多用されるなど、交換財が大きな変容を遂げたため [山本・山本 1981: 97-138; 山本真鳥 1985] に、儀礼交換の行事に際しては、もっぱら大量の現金を必要とするようになってきた。これは



実は *matai* システムにとっての大きな危機である。なぜなら、自給自足経済を運営するに足りるだけの（平たく言うなら、食っていけるだけの）土地をもち、本来なら経営が成り立っていくはずの在地世帯が、在地であるがゆえに '*āiga* の名声を維持するべく儀礼交換を行うためには、自らが自給することのできないものを必要とすることになるからだ。（かつてはそんなことはなかった。どの '*āiga* もブタもタロイモも生産していたし、'*ie lōga* も編んでおり、それで充分だったのである。）日常的にも、学校の授業料や、教会の献金、衣類を整えたり、お惣菜用の缶詰を買ったりするのに現金が要することは要るが、こちらはたかが知れている。けれども儀礼交換に必要な現金は桁外れに大きな額だし、葬式など突然に必要なことも多い。

こうして、'*āiga* は '*āiga* 経営の外側から現金を注入してもらう必要が出てくるわけだが、これが不在 *matai* の増加に大いに繋がってくるのである。もともと '*āiga* に居住せずに生活している不在メンバーは、'*āiga* の資源を利用せずに生活をなりたいとしている。そのメンバーが在地メンバーの息子や娘であれば、彼らは親への義務があるから儀礼交換を含めて様々な機会に '*āiga* へ現金を供給する。甥・姪であれば、大きな儀礼交換の時には多少協力してくれるかもしれない。しかしながら、その関係を超えてしまうと、もう協力は期待できなくなる。そこで必死で行われる '*āiga* とりこみ作戦が不在メンバーへの *matai* 称号授与となるのである。給与生活者であるアピア居住者や海外生活者は、村に住む人々よりも容易に現金を手に入れることができるから、そのターゲットとなり易いといえよう。'*āiga* への系譜的關係がいかなるものであるにせよ、*matai* にしてしまえば '*āiga* を維持する義務が生じてくるから、儀礼交換に際して大いに協力を期待できる。また、そうした都市生活者は '*āiga* の資源を利用する権利を潜在的にもっているが、都市でエスタブリッシュした人が田舎へ帰って住むことはまずないので、在地メンバーの生活基盤を侵すこともない。つまり、生活資源を与えないのに儀礼交換には協力が期待できるという、在地 *matai* にとっての上もない条件を不在 *matai* はもっていることになるのである。よしんば、称号名を授与するのに期待した協力が全く得られないとしても、次の代でそのラインから称号名を要求してきたときに、前任者の不協力を示して断わることだって可能だ。

また、不在 *matai* への称号授与はそのような意識的戦略でなされていないことだってある。'*āiga* が、すなわち在地 *matai* たちが、当面の儀礼交換に必要な財が集まらず困っている時、藁にもすがる気持ちで不在メンバーに助けを頼み、意外と気楽にその人が出してくれたとしよう。その不在メンバーはさらに以後何度かそうした機会に助けしてくれたとする。こうした経緯から *matai* はその不在メンバーに感謝の印として *matai*

称号を贈っても不思議はない。困った時に *matai* を助けるのは大きな奉仕 (*tautua*) なのだから。またこのように寛容に在地 *matai* を助けてくれた不在メンバーが称号を欲しいと意志表示すれば、前節の QY の 'āiga の如くに 'āiga はおそらく授与せざるを得ないに違いないのである。しかしながら、'āiga の好むと好まざるとにかかわらず、これら不在 *matai* たちは、ますます儀礼交換に大きな協力を果たしてくれるはずだ。

以上のような 'āiga にとっての不在 *matai* の経済的利点に加えて、不在 *matai* の政治的利点もある。政府の役人、著名人、有力者で、'āiga に暮らすことはないが、血縁をもつ人々に、'āiga はしばしば *matai* 称号の授与を行う。これはあたかも何らかの功績に対する褒美のような気すらするが、これは 'āiga にとっての一種のエリート取り込み作戦なのである。そうした<優秀な>人物は 'āiga の名を世に知らしめるのにおおいに功績あるはずで、出世した人のもとには血縁関係をもつ複数の 'āiga が殺到して称号授与を申し出ることもある。もちろんこうしたエリートは、経済的にも恵まれていることが多いから、儀礼交換にも大いに期待できるのである。

かつてより、'āiga で地道に *matai* に仕える人よりもアピアに住む白人とのハーフ (*afakasi*) に称号を授与することは多く行われてきた<sup>19)</sup> し、それが *matai* システムを崩壊させる原因であると糾弾する向きもある [KEESING 1934: 250]。がしかし、それは後者がアピアで商業等を営んで金持であり、そうした面での援助が大いに期待できたことと関連しているのである。現金面での援助を 'āiga は結構古くから必要としてきたようだ。

では、今度は不在 *matai* の側からこの問題を検討してみよう。生活資源を利用することなく、ただ一方的に儀礼交換に財を提供するだけなのに、なぜ 'āiga の不在メンバーは *matai* 称号を受けるのだろうか。この答えは微妙であるが、おおよそ以下の2つに要約できるだろう。まず、サモア社会の中で *matai* であるかないかによって人々から受ける敬意が大きく異なるということである。*matai* であれば、アピアの公式な席でもその称号名で呼ばれ、*matai* に相応しい敬語で語りかけられる。*matai* たちが談笑している中に加わり、同席することができる。もしもそれがサモアでちょっとは名の知られた称号名であれば、単に *matai* の仲間入りができるのみならず、*matai* のサークルでもたちまち一目置かれることになる。サモア人として、中年にさしかかっているのに *matai* となっていないということは、実に情けないことなのだ。称号は勲章のような単なる飾りで人間の本質的価値を決めるものではない、私はそんなものはい

19) 例えば、1920年代のマウ運動の指導者だった O. F. Nelson がサヴァイイ島の有力称号 Ta'isi をもっていたことは有名である。

らない、といていた大学出のエリート何人が、立派な称号名の授与を 'āiga に申し出られた時に本心から断ったであろうか<sup>20)</sup>。

ニュージーランドなど外国にいるときはどうだろうか。なるほど外国にいればそんなものは必要なさそうだが、しかし本国にいるほど切実に必要ではないにしても、サモア人コミュニティで *matai* に捧げられる敬意は同じだ。それでは西サモア内の別の村に住む時はどうだろう。この時にはますますもって *matai* であることが意味をもつ。よその村の *matai* でも *matai* となることによって、実際に居住し、土地利用している 'āiga の *matai* ——名目的な主人である——にもはや *tautua* (奉仕) する必要はない。さまざまな財の供出の命令に従うことなく、*sua* と呼ばれる食物の捧げ物をする必要はない。また、居住する村の *matai* の集まりで食物をふるまうことによって、*matai* 会議に参加も可能である。長く居住している村で 'āiga 内のごたごたからそこで称号を授与されなくても、よその村にある 'āiga から *matai* 称号をもらうなら、末席ではあっても村の *matai* の集まり (*fono*) に参加することだってできるのだ。

もう1つ、たとえ不在であっても *matai* となる利点は、称号をもつことによって生じる潜在的権利である。例えばニュージーランドで職を失ったとしても、帰って土地の分け前をもらいそこで暮らしていける、という安心感を *matai* になることによって得ることができる。もちろん *matai* にならなくても 'āiga には戻っていけるはずだが、しかし *matai* のほうが大きな顔をしていられるし、誰も文句の付けようがない。またニュージーランドで暮らす自分の子供や孫、甥姪だって、いざとなれば、オジさんが *matai* だ、と威張って 'āiga に帰ることもできよう。そうした保険としての称号授与の機能は大きい。それというのも、サモアでは誰か分からぬ人が 'āiga メンバーかどうかを知るのに、その人の直系の先祖にその 'āiga の *matai* がいるかどうかを指標としてきたからである。そしてそれは近い先祖であればあるほど 'āiga との関わりが大きい証となる訳だ。ニュージーランドである程度成功し、もはやサモアに帰ることも考えずにいたあるサモア人が、突然 'āiga から *matai* 称号授与の申し出があり、驚き戸惑った揚げ句に受けたが、最終的に彼を決意させたのは、それが子供や孫、甥たちに対し将来何かの役にたつかもしれないということだったようだ。

以上のように分析してみると、在地 *matai* の側にも不在 *matai* の側にも不在 *matai* への称号授与を歓迎する要因があるようだ。不在メンバーにも利点が存在する以上、在地 *matai* の側の不在メンバーとりこみ作戦としての称号授与は大いに成算のある事業であるといえよう。

20) 私には無理です、と本心からではなしに一応形式的に辞退するのはサモア式礼儀とされている。

## VI. 結 論

さて以上の考察を終えて、サモアの近代化・都市化に伴い、首長システムにもシステム上の多くの変化が生じている様子が納得できたに違いない。首長(家長)としての *matai* の役割は様々であるが、'āiga の土地に住み、'āiga に生きる人々の労働力や'āiga 固有の土地資源を配分し、'āiga のモラルのリーダーとなる、さらに外部に対して'āiga を代表して村の合議体の会合に出席したり、'āiga の名において儀礼交換に参加する、といった多くを数え挙げることができる。単に経営者であるばかりか、儀礼や伝承によく通じた伝統的知識人であり、人々のモラルのリーダーとして'āiga の名声を保つ、それ以外にも儀礼交換に必要な現金をたっぷり稼ぐ、そんな万能リーダーが *matai* の理想像である。しかし、かつてはいざ知らず、今日そんな万能リーダーがいるだろうか。また、*matai* は万能でも *matai* の手足となって働く若者がどれだけいるというのか。多くの'āiga は、有能な若者や少女がアピアで職についていたり、ニュージーランドに移民してしまったりで、労働力不足に悩まされているのである。かつては人々に労働の指示はするがあとは家の中で座っているだけだったといわれる *matai* だが、今日では自ら自家消費用の根裁類の世話をしたり、商品作物(バナナ、カカオ、ココヤシの三大作物に加えて最近登場の輸出用タロイモなど)の手入れをしたり、というのが現実である。

こうして伝統的 *matai* の役割は、過疎化する村で'āiga を守る在地 *matai* と、都市で近代的職業に従事して'āiga に主として儀礼交換用の現金をもたらず不在 *matai* との二極に分化されざるを得ない。役割を2つに分けてはじめて現代の *matai* システムは成り立っているといってもいいほどだ。というのも、不在 *matai* なしに、あるいは不在 *matai* でなくともアピアやニュージーランドに住む近親者の助け(いずれこれを *tautua* として称号を授けられ、不在 *matai* となる可能性が高い)なしに、うまく運営されている'āiga はまずほとんど存在しないからである<sup>21)</sup>。不在 *matai* は今日では *matai* システムそのものに内在化されているのであり、これなしにシステムは成り立たないといってもよい。

しかし、興味深いのは、*matai* システムのもつ文化的統合力である。近代化というベクトルは村から都市であるアピア、さらには移民先の外国へ向きながら、また人口

<sup>21)</sup> とはいうものの、政府の役人であったり先生などしながら、村に住んで伝統的な *matai* の役目も果たしている人が稀にはある。自分が働くことで現金収入もある程度確保しつつ、自給用の農耕も'āiga メンバーにやらせているのである。

もそれに沿って少しづつ流れ移動していくのに、依然としてサモア人の価値のベクトルは各々の過疎化した伝統的村へと向いている。サモアの高位称号をもつ人が外国で客死すれば、その遺体は防腐措置が施されたのち、飛行機でサモアへ、そして村へと運ばれてそこで葬儀が行われる。もちろん、'āiga のその地に埋葬されるのである。サモア人は世界中のどこでどのような活動をしていても、matai 称号がある限り自分の属すべきところ——それは地図でみれば点にもならないかもしれない南太平洋のサモア諸島の X 村の 'āiga Sā Y の土地である——をもち、そこに見えない根を生やしているのである。不在者の matai 称号はまさにその地と不在者とを結ぶメディアである。不在 matai の称号を媒介として matai システムを維持するのに必要な現金が、移民先からアピアや村へ、またアピアから村へと流れこんでいくのである。称号分割を梃とする不在 matai への称号授与は matai システム、すなわち首長システムの破壊であると糾弾するサモア人識者も多いけれど、とりあえずは首長システムの現代世界システムへの適応なのだと考えるべきであろう。

## 謝 辞

小論のもととなったフィールド・データは、1978年6月～79年9月、80年2～3月および7～8月、81年5～9月、84年8月、85年8～9月の調査で得られた。78～79年、81年および85年の調査は各々アメリカ合衆国イースト・ウェスト・センター、放送文化基金、文部省科学研究費補助金の財政的援助のおかげで遂行することができたので、この場で感謝の気持ちを表明したい。また、調査に数々の便宜を計ってくれた西サモア政府、とりわけ総理府、統計省、経済開発省に、そしてさらにインフォーマントとして協力を惜しなかつた西サモアの大勢の人々にも感謝を捧げたい。しかし論文のすべての責任は著者にある。

## 文 献

- ALA'ILIMA, Fay C. and Vaiao J. ALA'ILIMA  
1966 Consensus and Plurality in a Western Samoan Election Campaign. *Human Organization* 49: 240-255.
- CONGREGATION CHRISTIAN CHURCH OF SAMOA (LONDON MISSIONARY SOCIETY)  
1978 *O le Tusi Fa'alupega o Samoa*. Apia: Malua Printing Press. (First Edition in 1940s)
- CONNELL, John  
1987 Paradise Left? Pacific Island Voyagers in the Modern World. In J. T. Fawcett and B. V. Cariño (eds.), *Pacific Bridges: The New Immigration from Asia and the Pacific Islands*, New York: Center for Migration Studies, pp. 375-404.
- DAVIDSON, James W.  
1967 *Samoa mo Samoa*. Melbourne: Oxford University Press.
- HANDY, E. S. C. and W. C. HANDY  
1924 *Samoa Housebuilding, Cooking and Tatooin*. B. P. Bishop Museum Bulletin 15, Honolulu: B. P. Bishop Museum.

- HIROA, Te Rangi (BUCK, Peter)  
 1930 *Samoan Material Culture*. B. P. Bishop Museum Bulletin 75, Honolulu: B. P. Bishop Museum.
- KALLEN, Evelyn  
 1982 *The Western Samoan Kinship Bridge*. Monographs and Theoretical Studies in Sociology and Anthropology in Honour of Nels Anderson 18, Leiden: E. J. Brill.
- KEESING, Felix  
 1934 *Modern Samoa: Its Government and Changing Life*. London: G. Allen & Unwin Ltd.
- KRÄMER, Augustin F.  
 1902 *Die Samoa-Inseln: Entwurf einer Monographie mit besonderer Berücksichtigung Deutsch-Samoas*. 2 Band. Stuttgart: E. Naegle.
- MARCUS, George E.  
 1980 *The Nobility and the Chieftly Tradition in the Modern Kingdom of Tonga*. Wellington: The Polynesian Society.
- MARSACK, C. C.  
 1961 *Notes on the Practice of the Court and the Principles Adopted in the Hearing of Cases Affecting (1) Samoan Matai Titles and (2) Land Held according to Customs and Usages of Western Samoa* (revised edition). Apia: Government Printer.
- MEAD, Margaret  
 1943 *Coming of Age in Samoa*. Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books. (First Published in 1928)  
 1969 *The Social Organization of Manua*. B. P. Bishop Museum Bulletin 76, Honolulu: B. P. Bishop Museum. (First published in 1930)
- NEW ZEALAND GOVERNMENT  
 1973 *Official Yearbook*.  
 1985 *Official Yearbook*.
- PACIFIC PUBLICATIONS  
 1984 *Pacific Islands Yearbook 15th Edition*. Sydney: Pacific Publications.
- PITT, David  
 1970 *Tradition and Economic Progress in Samoa*. Oxford: Clarendon Press.
- PITT, D. and C. MACPHERSON  
 1974 *Emerging Pluralism: The Samoan Community in New Zealand*. Auckland: Longman Paul.
- SCHULTZ, E.  
 1911 The Most Important Principles of Samoan Family Law, and the Laws of Inheritance. *Journal of the Polynesian Society* 20: 43-53.
- SHANKMAN, Paul  
 1976 *Migration and Underdevelopment: The Case of Western Samoa*. Colorado: Westview Press.
- STAIR, J. B.  
 1897 *Old Samoa*. London: Religious Tract Society.
- 杉本尚次  
 1982 『西サモアと日本人酋長——村落調査記 1965-1980』古今書院。
- TIFFANY, S.  
 1974 The Land and Titles Court and the Regulation of Customary Title Successions and Removals in Western Samoa. *Journal of the Polynesian Society* 83: 35-57.  
 1975 Entrepreneurship and Political Participation in Western Samoa: A Case Study. *Oceania* 46: 85-106.  
 1979 Port Town Village Organization in Western Samoa. *Journal of the Polynesian Society* 88: 127-175.
- TURNER, George  
 1884 *Samoa, A Hundred Years ago and Long Before*. London: Macmillan.

山本 都市化の中の首長システム

WESTERN SAMOA GOVERNMENT

- 1967 *Statistical Yearbook.*
- 1975 *Third Five Year Development Plan 1975-1979.*
- 1978 *Annual Statistical Abstract.*
- 1980 *Annual Statistical Abstract.*
- 1982 *Annual Statistical Abstract.*
- 1984 *Western Samoa's Fifth Development Plan 1985-1987.*

藪内芳彦

- 1967 『ポリネシア——家族・土地・住居』大明堂。

山本真鳥 (YAMAMOTO, Matori)

- 1984 「ファレアタの地縁組織——サモア社会における称号システムの事例研究」『国立民族学博物館研究報告』9(1): 151-189。
- 1985 「サモアにおける交換財の変容」『文化人類学』1: 126-148。
- 1986 「サモアの家族」原ひろ子編『家族の文化誌』弘文堂, pp. 117-136。
- 1987 Territorial Organization of Faleata: A Case Study of the Title System in Samoan Society. In I. Ushijima and K. Sudo (eds.), *Cultural Uniformity and Diversity in Micronesia*, Senri Ethnological Studies 21, Osaka: National Museum of Ethnology, pp. 205-237.

山本 泰

- 1987 「『間人社会』の比較社会学」見田宗介・宮島喬編『文化と現代社会』東京大学出版会, pp. 291-324。

山本 泰・山本真鳥

- 1981 「消費の禁止/性の禁止(1)——サモア社会における交換システムの構造」『東京大学新聞研究所紀要』29: 67-186。